

## フランス語接続法の意味論的用法と語用論的用法の関係性について

井上大輔(上智大学大学院)

フランス語の接続法においては、Huot (1986) や井上 (2018) において語用論的用法を持つ可能性が指摘されている。しかし、これらの研究においては、どのようにしてこうした用法が生じるかは説明されていなかった。本発表の目的はフランス語接続法を持つ語用論的用法について、意味論的観点から捉えなおすことである。

本発表では、まず接続法の意味論的用法について、真偽判断とその「引き受け (prise en charge)」の観点から説明する。その上で真偽判断を表す接続法の機能と情報構造的要素が関連していることについて述べることにしたい (守田 2015)。次に、そうした情報構造的要素が前提を持つ anaphoricity から生じていることについて説明する。最後に、anaphoricity を活用することで、話者は真偽の引き受けの割り振りを停止することができ、それが対話者に対するポライトネスを表すことを証明する。これが本発表の目的である。

### —参考文献

Huot, Hélène. 1986. "Le subjonctif dans les complétives : subjectivité et modalisation."

In *La grammaire modulaire*. Eds by Mitsou Ronat & Daniel Couquaux. Paris: Minuit, 81-111.

Inoue, Daisuke. 2018. "la notion de la prise en charge et le choix du mode dans la complétive des interronégatives inversée." *Etudes de langue et littérature françaises*, 113: 185-200.

守田貴弘. 2015 「接続法の多元的拡張 Le fait que の分布と法の選択」川口順二編『フランス語学の最前線』東京：ひつじ書房, 107-139.